

令和元年度 第1回学校運営協議会記録

1. 日 時 令和元年7月2日(火) 13時30分～15時30分

2. 場 所 本校校長室

3. 出席者 学校協議会委員(出席5名・欠席1名)
帝塚山学院大学教授 溝手 真理
学校歯科医 戸堂 耕造
高石市立高石中学校校長 南 良博
本校同窓会会長 山口 裕通
本校 PTA 会長 松田 直子

4. 協議概要 協議に先立って、
「学校経営計画」、
「今春の進路状況」、
「生徒状況」、
「生徒会活動」、
「国際交流・広報活動」、
「PTA 活動」、
「教科書採択」、
「各学年の状況」等の報告を行いました。
以下、協議において出席委員から出された主な意見等です。

(安全対策・防犯面について)

- 安全面（防犯）対策はどうなっているか。子を持つ親としては心配なところ。学校の先生は守ってくれるのか。決して戦ってほしいというわけではなく、命を守る手立てや防衛する手段・ルールがあった方がよい。
- 池田小学校の事件等を通して、悪意のある人が学校に来るといふ前提で考えていくべき。

→不審者対策を強化しています。夏休み明けから教職員は学年色の紐を付けた名札を着用し、外来者には外来者用の名札を着用していただくことを徹底します。刺股を配備し、撃退あるいは、生徒が逃げる時間稼ぎができるように備えています。

(進路状況について)

- 入学定数厳格化の流れの影響はあるようだが、大学受験で合格できなかった生徒の進路が気になる。専門学校などへの進路変

更も多いようだが、大学に合格できなかった生徒が、浪人もせずに進路変更するというのは、意思が弱い感じで残念。家庭の考え方にもよるが、粘って浪人する生徒が増えてほしい。

- 理系と文系のバランスについては、一般に長期的には理系が少しずつ減っているイメージだが、実際はどのようなものか。看護系が増加傾向なところがやや気にかかる。理系として数学にさらにもっと力を入れ、生徒に多様な進路を提供してほしい。

→浪人するかどうかはご家庭での考え方もありますので、高校としては基本的には現役での合格をめざしますが、自分の将来の希望をしっかりと見据え、粘り強く簡単にあきらめない姿勢をもつように指導していきたいと考えています。

(生徒状況について)

- 遅刻件数が依然と比べるとどんどん減っているのはとても良いことだと思う。
- 遅刻減少を目指すこと自体はいいことだが、同調圧力が強すぎる気がする。長期的な変化を見るのはいいが、単に前年度と比較することにはあまり意味を感じない。
- 頭髪もそろそろ自由になっていいのではないかと考える。国際的な時代となり、現在は見た目への価値観が変わりつつある。同調圧力をかけるのではなく、もう少し高石高校にはオープンに変わってほしい。将来的にはもっと多様性を尊重すべきではないか。校則としては、“節度をもった”くらいでいいのでは。
- 自然な状態、手を加えない状態を大切にしてほしいという指導なら良いのではないか。
- 遅刻指導週間等の取り組みは、生活リズムを作らせるには非常にいい取り組みで、この取り組みは大学生になっても生きてくる。生活習慣が自然に身につけていると、社会で生き抜くことができる人間になっていくことができる。なぜこのような取り組みをしているのか、という意味合いをしっかりと伝えてあげるとさらに良いのでは。

(PTA 活動について)

- 最近は PTA 活動が大変だと一般に言われがちだが、高石高校の

保護者はとても協力的。何かあっても声をかけたら誰かしらが動いてくれるので、励みにもなる。今後もこの雰囲気を引き続き教員と協力してつくっていききたい。

(学校経営計画について)

- 学校経営計画の中期的目標に対する自己評価のところ、生徒向け学校教育自己診断「授業関連」の結果（73%）と教職員向け学校教育自己診断「授業関連」の結果（94%）の差は何か。94%の先生が何かしら改善してきたということだが、その根拠は何か。自分の授業のどこをどう変えてその自己評価をしているのか。それが生徒と乖離しているのはなぜか。「高校生だからわかるだろう」と思ってどれだけいいものを与えても、子供たちが理解していないと意味がない。
- 今の子供たちは昔と違って構って見てあげないといけない面がある。「高校生だからできるだろう」とこちらが考えていても、それに見合う力が子供たちにはついていないことが多い。
- 自己評価の数値化の意味合いをどう捉えるかが重要。数値化することで、どうしても数字が高ければいいという認識になるので、数値化する意味合いや何をもって良い数字なのかということ議論する必要がある。

→授業改善に向けては、それぞれの教員が日々取り組んでいるところですが、今後、学校での教育のあり方が大きく変化することを踏まえ、学校全体として授業改善に向けた取組を進めるべきだと考えています。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた研修や、研究授業を通して、改善のための情報共有を進めます。